

- ④ 「アンデス山脈の家畜と祖先種、そしてジャガイモ」  
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科  
准教授 大山 修一

- ⑤ 「南米・パタゴニア氷原—30余年の調査の軌跡」  
筑波大学名誉教授（雪氷地理学）、AACK  
安仁屋政武

## 図書紹介

### 寒冷の系譜

北大山岳部九十周年記念海外遠征史 1926～2016  
北大山の会、2015年5月31日発行、401ページ 別添：DVD（3枚組）  
北大山岳部創立90周年記念 映像で見る海外遠征史

横山宏太郎



大山の会は、北海道の山々の開拓・初登頂に始まり、ダウラギリ冬期初登頂（1982-83）をひとつの頂点とする「寒冷の系譜」を紡いできた。本書は、90年にわたるその歴史を、海外遠征を中心にまとめたものである。章立ては以下のようにになっている。

- 通史 海外遠征の視点から見た北大山岳部90年の軌跡  
第一部 証言—その時代  
第二部 北大山岳部の海外遠征  
第三部 北大山岳部の海外学術調査活動  
第四部 北大山岳部のルーム  
資料 北大山岳部・山の会 海外遠征年表

表紙を見るだけで、昔に戻ってしまうようだ。山岳部現役時代、北の山へのあこがれを胸にくりかえし開いた北大山岳部報の、あの表紙。そして開けば当時のあれこれが蘇ってくる。

これは、本年発行された、北大山岳部九十周年記念海外遠征史「寒冷の系譜」。B5判で401ページ、ずっしりと重い。さらに、映像記録として3枚組のDVDが添付されている。

北大の人たちは、明治時代末に我が国に伝わった新しい技術であるスキーを利用して、まだ地図もない雪山に分け入り始めた。1912年（明治45年）には北大文武会スキー部が創立され、北海道中央高地の山々の冬期初登頂がなされていく。そして1926年11月、北海道大学山岳部が創立される。

以後、北大山岳部と、そのOB組織である北

「通史」では、副題の通り、海外遠征の視点から見た北大山岳部90年の軌跡を語る。まず「寒冷の系譜」と題して、「北大山岳部には創立当時、その前夜の時代を含めて、登攀行動の潜在的志向として『寒冷の系譜』という流れがあると仮定し、その発端、形成の過程を実際の山行記録の中で考察することによって」スキー伝来からダウラギリまでの歴史を俯瞰する（渡辺興亜）。続く「ダウラギリ後の30年史」は第二部第三章の「概要」とあわせ、ある意味困難な時代から将来を見据える（米山悟）。

第一部では、「探検の時代（1926～1969）」「ダウラギリの時代（1970～1983）」「ポスト・ダウラギリの時代（1984～現在）」と時代を区分し、それぞれの時代に活躍した人々たちへの貴重なインタビューと座談会で構成され、時代背景

や考え方がよくわかる。

第二部でも、おなじく三つの時代に分けて、1962年のチャムラン峰（ネパール）に始まるAACH（北大山岳部・山の会）の海外遠征の記録が続く。「探検の時代」、チャムランでは、外貨割当てでAACKのサルトロカンリ隊と競合して苦勞があったらしい。現役時代の筆者の印象に残っているのは、1963年のナラ・カンカール隊である。目的の山が見当たらず、調査のなかで越境して中共軍に捕まったという話（宮地隆二）は、現役当時、その記録に接し、なんと面白いことをする人たちだろう、と思ったものである。そんな探検的登山は、私達にとってもひとつの夢でもあった。AACHが中心となった、南極観測に向けたカラフト犬（犬ソリ）の訓練も紹介される（安藤久男）。

「ダウラギリの時代」、実質十数年という期間、マッキンリーに始まり冬期トリスル（撤退）、ドレフェカル、クンヤン・チッシュ北峰、そして冬期のバルンツェと次々に登山隊を送りだし冬の8000 m峰登頂に向けて進む姿には、強い勢いを感じる。中核隊員は、筆者と同世代から数年若手までの人たちで、友人・知人も多く、その活躍に少し羨望の混じった感動を覚える。「寒冷の系譜」は、冬期ダウラギリで一つの頂点に達したと言えるだろう。

「ポスト・ダウラギリ」では、対象と方法の選択に自由度が増したことによって、ヒマラヤの小規模隊、各地の大岩壁、カムチャツカ、台湾など、様々な地域・登り方への展開も興味深い。

第三部では南極とヒマラヤを中心に、AACHが輩出した多数のフィールドワーカーの活躍が述べられている。また第四部では、心のよりど

ころともいえるルームの変遷が語られ、1994年に完成した北大山岳館が最後に紹介されている。

残された映像記録は実に1380時間におよぶというが、およそ十分の一に編集して、3枚組のDVDに収められている。3枚は、三つの時代に対応する。チャムランは動画があり、ナラ・カンカールは静止画とナレーションであるが、50年以上前の貴重な映像を見ることができる。最近の登山までを含め一覧できる映像記録は、ほかに例がないのではないだろうか。

じつは本書は、さきに映像データのデジタル・アーカイブ化を進めていたところ、「映像だけでは表現できないそこに集まった人たちの背景、決断、思いなどに多角的に照明をあてて、遠征史という形に残しておく（中村晴彦、編集後記）」ことに発展した、という。両者あわせて「寒冷の系譜」のまさに集大成になったことをお祝いし、出版委員会をはじめ関係各位に拍手をおくりたい。

「北」はその中に「未知」を含んでいるようにおもえるのだが、「寒冷」という厳しさを加えてさらに魅力を増すのではないか。北大、AACHで活躍した人たちの中には、京都をはじめ関西の出身者も多い。北大と京大、地理的に離れてはいるが、山をめざす者の心には同じ未知への志向が流れているように筆者は感じている。本書をAACKの皆さんにもおすすめしたい。

本書は、DVD付き・送料込みで5,000円。AACHウェブサイトから申し込みができる。  
<http://aach.ees.hokudai.ac.jp/xc/modules/Center/activity/90th/>

## AACK ニュース

### 会員田中二郎氏が「大同生命地域研究賞」を受賞

2015年7月15日、2015年度「大同生命地域研究賞」(大同生命国際文化基金)に田中二郎・京都大学名誉教授が選ばれました。アフリカの狩猟採集民研究と地域研究への国際貢献が評価

されたのが授賞理由である。

大同生命国際文化基金  
<http://www.daido-life-fd.or.jp/>